

## ローベルト・ムージルの新資料 「レオナルド・ダ・ヴィンチの最初の彫刻」

——テキストと注解——

長谷川 淳 基\*

Robert Musils unbekannter Artikel: „Die erste Skulptur Lionardo da Vinci’s”  
——Text und Anmerkungen——

Junki HASEGAWA

### I. 始めに

ローベルト・ムージルは第1次大戦後再び作家活動を開始した。『三人の女』や2作の演劇作品が書かれたのはこの時期である。が、収入ということではプラハの新聞プラーガー・プレッセへの記事執筆に拠るところが大きかった。寄稿した量、本数もその収入に相応して大きなものである。ムージルはウィーン事情をプラハへ書き送ったのであった。この間の事実関係は、先ずクルト・クロロップが2本の論文<sup>1)</sup>に書いた。彼は次いで協力者バーバラ・ケプローヴァと共に『ローベルト・ムージル、プラハへの手紙』<sup>2)</sup>を編集出版した。クロロップならびにケプローヴァの成果は、現在のアドルフ・フリゼー編のムージルの作品集の第2巻<sup>3)</sup>と『手紙』<sup>4)</sup>に反映されている。

しかしながら先の『プラハへの手紙』を、従ってフリゼー編の『手紙』も同じであるがそこに収められているムージルの手紙を見ると、ムージルがプラハへ送った新聞掲載用の原稿と実際に新聞に掲載された記事の事実対応に不明ないし未解明の点が多く残されていることが分かる。

こうした経緯を経て、本論の筆者が発見したムージルの新資料については論文2本<sup>5)</sup>により詳細を報告したが、今年2019年春の調査でさらにムージルの新資料を確認することができた。以下、その資料記事1点と若干の分析について報告する。

### II. テキスト „Die erste Skulptur Lionardo da Vinci’s”

ムージルの新資料は1923年7月24日付けのプラーガー・プレッセ紙朝刊、第3ページに掲載された記事で、ma.の署名がある<sup>6)</sup>。先ずはムージルのこの記事を改行や誤植なども含めてプラーガー・プレッセ紙のオリジナルのままに見ることにし<sup>7)</sup>、続けて日本語訳を記す。

---

\* 人間関係学部 人間関係学科

× Die erste Skulptur Lionardo da Vinci's, die bisher aufgefunden wurde, scheint die sogenannte Albizzi-Madonna zu sein. Sie wurde 1897 in Italien von Mr. G. B. Debbles, Bursar des All Souls College in Oxford, erworben und ist auch unter dem Namen Signa-Madonna (nach dem Ort ihrer Auffindung) in der Kunstgeschichte bekannt. Nach den Ergebnissen von Adolfo Venturi und Sir Theodore Cook scheint es wenig Zweifel mehr zu unterliegen, daß es sich um ein authentisches Werk Lionardos handelt. Sie ist im Jahre 1478 entstanden und war für das Landhaus von Lionardo's Freund Albizzi bestimmt, das im Dorf S. Ilario dicht bei Signa, nah von Florenz lag, er blieb dort mehr als 400 Jahre unberührt. Wahrscheinlich ist die Signa-Madonna eine der vielen bisher unentdeckten Plastiken, durch welche Lionardo den berühmten Auftrag für „il cavallo“ bekam, und man vermutet, daß die Madonna mit dem Kind von Verrochio sowie die plastischen Gruppen von Luca della Robbia und vielen andren durch Lionardos Gruppe beeinflusst sind. Sir Cook befindet sich in Florenz, um Beweise dafür zu sammeln.

リオナルド・ダ・ヴィンチの第一番目の彫刻は、これまでに発見されたものということだが、いわゆるアルビッツィのマドンナであるらしい。このマドンナは1897年イタリアで、オックスフォードのオール・ソールズ・カレッジ会計係G. B. ディブリー氏が入手したもので、美術史ではシーニャのマドンナ（このマドンナが発見された地名に因む）という名でも知られている。アドルフォ・ヴェントゥーリとサー・テオドール・クックの結論によると、リオナルドの真正な作品であることに何ら疑問を差し挟む余地はないとのことである。このマドンナは1478年の製作、リオナルドの友人アルビッツィの別荘のためであった。この別荘はフィレンツェ近郊シーニャに隣接するS. イラーリオ村にあった。以来この作品は400年以上この村に留まってきた。おそらくシーニャのマドンナはリオナルドが有名な「馬」の注文を受ける元となる多くの未発見の彫刻の一つであり、推測としてはヴェロッキオ作の幼子を伴うマドンナ像の数々やルカ・デルラ・ロbbieアのグループならびに他の多くの彫刻グループはリオナルドのグループに影響を受けている。サー・クックは目下フィレンツェに滞在しており、証拠の収集に当たっている。

### Ⅲ. 注解

#### 1. 誤植と誤記

最初にプラガー・プレッセ紙のテキストの誤植またはムージルによる誤記について確認しておこう。プラガー・プレッセ紙の誤植については早い時期にムージルが編集長に「私の記事については、しかるべき人によって校正がなされるよう、十分にご配慮をおねがいしたい」との苦情を言う手紙を書き送っている<sup>8)</sup>。

ダヴィンチの記事の誤植あるいは誤記は以下の1) から3) の3箇所である。

- 1) 第4行の G. B. Debble
- 2) 第13行 S. Ilario
- 3) 第14行 er

先ず1) の G. B. Debble であるが、正しくは G. B. Dibblee である。ムージルが記事の中で記しているように、問題の聖母子像をダヴィンチの作と推測し、断定したのはクックである。その根拠等の詳細を記したクックの書 *Leonardo da Vinci. Sculptor.* は1923年に出版された<sup>9)</sup>。その本によると著者クックは、母子像の作者を推定する作業を進める際に、像をイタリアで購入したディブリーその人の協力を得ている<sup>10)</sup>。クックは研究結果を先ずは1919年に「周囲の身近な人たちに供する目的で、34ページの小さな冊子にまとめた」。次にこの小冊子が「レオナルドに関して、現存する最大の権威であるイタリア人アドルフォ・ヴェントゥーリ」の目に留まることとなった。そして、1922年夏にこのヴェントゥーリがイタリアの美術雑誌にクックの説を紹介し、全面的に支持したのであった<sup>11)</sup>。1919年の小冊子、1922年のヴェントゥーリの雑誌記事、そして1923年のクックの著書は一貫して Dibblee と正しく綴られていた<sup>12)</sup>。ムージルの取材ソースが明らかでないので断定はできないが、ディブリーのつづり字についてはプラガー・プレッセ紙の側のミスかもしれない。

次いで2) の S. Ilario は S. Ilario すなわち Sant' Ilario である。これもクックが「この愛らしい浮彫は今後アルビッツィのマドンナと呼ばれるべきである。[中略] この名は有名なイタリアの一派に因み、フィレンツェ近郊セント・イラリオにある一派の別荘に像はしつこくを厚く施された状態で長い年月そのままになっていた」こと、その後この館は貴族フェデリーギ家の縁続きパスクアーレ・オルシに売却され、ついにはその所有者がディブリー氏となった旨をはっきりと書いている<sup>13)</sup>。同じくプラガー・プレッセ側のミスと思われる。

3) の代名詞 er は内容としてはクックの報告を正確になぞっているだけであり、die Albizzi-Madonna または die Signa-Madonna あるいは die erste Skulptur をうけるならば sie であり、10行目まで遡って ein authentisches Werk Lionardos を受けるとしても es でなければならない。

#### 2. Lionardo の表記について

辞典類を見ると Leonardo は Lionardo と綴る、と書かれている<sup>14)</sup>。ムージルがモニカ・マン宛てた手紙が興味深い。

1939年2月17日

親愛なるモニカ様

あなたの真に個人的かつ美しい鉛筆書き、そして、これそのものがすでにグラフィックアートを生み出しているのですが、それに対して私はタイプ打ちでお返事いたします。リオナルドならこのことで私を羨むでしょうが、私としては単に時間がないからなのです。書くことについて私は、前方に行く願いの後ろから就いていくようには書きません。ということで、どうしても自分の思いよりも短い文章にならざるをえないのです。[後略]<sup>15)</sup>

レオナルド・ダ・ヴィンチは左利きであり、そのために裏返しのスベルすなわち鏡文字で膨大なノート綴ったことで知られる。もっともそのダヴィンチも他人に宛てた手紙などでは当然のことながら正常な文字で書いた。がダヴィンチにとっては、正常な文字を書かねばならない時には「著しい不便を感じ」ており<sup>16)</sup>であり、もしも仮にタイプライターがその当時発明されていたならば、手紙を書く際などには大いに重宝したに違いない。ムージルはモニカ・マンにそう書いている。

若い時代の日記での表記を見ると、ムージルはLeonardoとも綴っている<sup>17)</sup>。

### 3. 人名等

クックの説を支えたヴェントゥーリ Adolfo Venturi についてはクック自身が著作の中で書いている。ダヴィンチの素描集の編集者としてその名を今に残すヴェントゥーリであるが、その素描集の出版は1924年、すなわちムージルのこの記事の翌年に第1巻が出る。ダヴィンチの師匠ヴェロッキオとルカ・デルラ・ロbbiaについては特に本論で言及する事柄はない。

本論執筆に当たり教えられることの多かった上平貢の『レオナルドと彫刻』<sup>18)</sup>にはこのアルビッツィのマドンナの写真が掲載されている。このマドンナの浮彫はディブリーが入手した時点では右かどが大きく欠けていたが、やがて彼のもとで補修が施された。クックの本に載っている写真は浮彫のかどが欠けている。この補修についてはクックが著書の中で言及している<sup>19)</sup>。従って上平貢の著作に掲載されている写真は修復が施された後のものである。

## Ⅳ. 結び

以下本論で論じることができなかった点について記す。

ムージルは先に言及した日記、あるいは遺稿原稿<sup>20)</sup>の中でダヴィンチ、そしてポール・ヴァレリーの名を挙げている。ヴァレリーの『テスト氏』とムージルの『特性のない男』との影響関係についても繰り返し指摘されていることであるが、ダヴィンチを巡る二人の見解も合わせて考察すべきテーマなのかも知れない。ムージルはノヴァーリス、リュヒナー、もしくはゲーテに関心を抱いている。これらの作家の共通点は文学の分野にのみ知識と関心が限定されない。その点でムージルは万能の天才ダヴィンチにも関心があったのかもしれない。

その他ムージルの妻マルタは画家である。マルタが若くして死別した最初の夫フリッツこそは将来を嘱望された画家であり、マルタとフリッツ二人してイタリアに造詣があった。

このマルタの2番目の夫マルコヴァルディはローマ在住のイタリア人実業家であった。この2回目の結婚でマルタは長男ガエタノと長女アンニーナの母となった。破産したマルコヴァルディと別れたマルタはアンニーナを引き取り、ガエタノはそのままローマで父と暮らした。アンニーナは母マルタが3番目の夫に選んだムージルのもとで育ち、やがてベルリン、ウィーンの両大学で美術史を学んだ。ムージルの美術への関心はマルタそしてアンニーナとの関係の中で育まれた面もあったにちがいない。マルタそしてアンニーナはイタリア語に長けていたはずである。

以上の点については、今後に予定しているドイツ語の稿で論じることとする。

## 注

- 1) Krolop, Kurt: Robert Musils Beiträge für Prager Blätter I. In: Germanistica Pragensia II (=Acta Universitatis Carolinae, 1962 Philologica I). S. 55-74  
Krolop, Kurt: Robert Musils Beiträge für Prager Blätter II. In: Germanistica Pragensia III (=Acta Universitatis Carolinae, 1964 Philologica I). S. 13-28
- 2) Barbara Köpplová, Kurt Krolop (Hrsg.): Robert Musil. Briefe nach Prag. 1971 (Rowohlt).
- 3) Robert Musil: Prosa und Stücke, kleine Prosa, Aphorismen, Autobiographisches, Essays und Reden, Kritik. Herausgegeben von Adolf Frisé, Reinbek bei Hamburg (Rowohlt) 1978.
- 4) Robert Musil: Briefe 1901-1942. Kommentar. Register. Herausgegeben von Adolf Frisé, Reinbek bei Hamburg (Rowohlt) 1981 (以下Bと略記。その後にページ数を記す)
- 5) Robert Musils zwei unbekannte Texte. Kritik: Jubiläums-Ausstellung der Künstler-Genossenschaft Wien & Aktennotiz an das Bundesministerium für Heereswesen. 「人間学研究」第15号, 椋山女学園大学人間関係学部・大学院49-56頁  
Robert Musils unbekannte Texte. Kleine wissenschaftliche Beiträge für Prager Presse.  
この原稿はMusil-Forumに掲載予定である。
- 6) Prager Presse, 24. Juli 1923, Morgen-Ausgabe, S. 3: Kulturchronik
- 7) 行数を示す右端のアラビア数字は筆者によるものである。
- 8) 1921年4月3日付ラウリン宛。(B. S.224)
- 9) Theodore Andrea Cook: Leonardo da Vinci, Sculptor. London (Arthur L. Humphreys) 1923
- 10) Cook, S. 2: „with the assistance of Mr. Dibblee”
- 11) Cook, S. 7
- 12) クックはヴェントゥーリのイタリア語記事を自身の書に再録している。Cook, S. 10-12
- 13) Cook, S. 13
- 14) Brockhaus Enzyklopädie in 20 Bdn. Elfter Band. 1970, S. 347: Leonardo da Vinci.
- 15) B. S. 942. 原文の一部を記す。An Monika Mann, 17. Feb. 1939. Liebes Frl. M. Ihrem sehr persönlichen u. schönen Bleistift, der wahrhaft schon Graphik erzeugt, erwidere ich maschinell; Lionardo hätte mich zwar beneidet, aber ich tu's bloß aus Armut an Zeit.
- 16) 裾分一弘, 在里寛司著『レオナルド・ダ・ヴィンチ双書, レオナルドと絵画』岩崎美術社1977, 76ページ
- 17) Robert Musil: Tagebücher. Herausgegeben von Adolf Frisé, Reinbek bei Hamburg (Rowohlt) 1976, S. 35
- 18) 上平貢著『レオナルド・ダ・ヴィンチ双書, レオナルドと彫刻』岩崎美術社1977
- 19) Cook, S. 15

- 20) Robert Musil: Tagebücher. Anmerkungen, Anhang, Register. Herausgegeben von Adolf Frisé, Reinbek bei Hamburg (Rowohlt) 1976, S. 715